

Title	西南フランス出土のハンドアックス : St. Meme les Carrieresの採集資料
Sub Title	A hand axe from St. Meme les Carrieres in Southwest France
Author	田中, 亮(Tanaka, Ryo)
Publisher	三田史学会
Publication year	2008
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.77, No.1 (2008. 7) ,p.141- 152
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	資料報告
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20080700-0141">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20080700-0141</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 西南フランス出土のハンドアックス

— St. Mème les Carrières の採集資料 —

田 中 亮

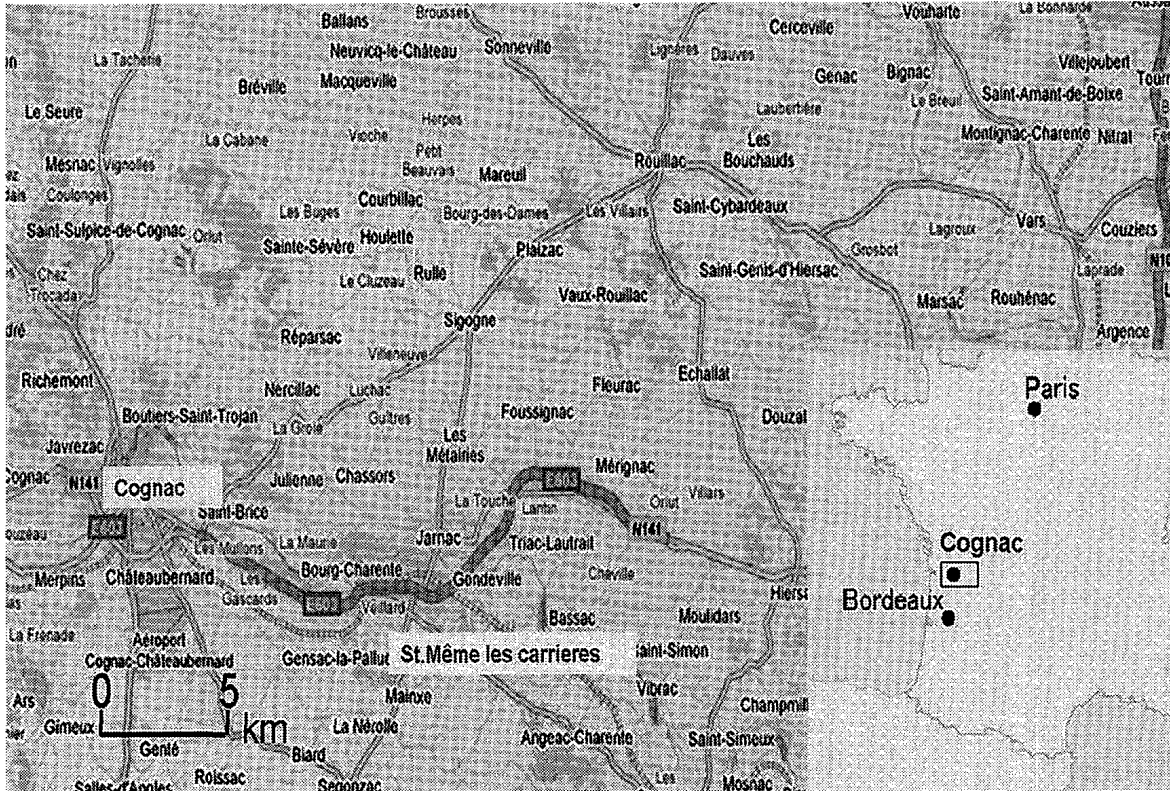
はじめに

現在筆者が所属する慶応義塾大学民族考古学研究室には国内外の石器資料が数多く所蔵されているが、その中でフランスにおいて採集されたハンドアックスが一点存在する。これはかつてベルギーに滞在していた慶応義塾大学の卒業生が現地の研究者から譲り受け、その後研究室に寄贈されたという資料である。表採資料であり正確な出土位置、出土層位が不明なため考古学資料として限界もある。しかし後述するように今回紹介するハンドアックスは、本格的な発掘調査の行われていない地域での資料であること、下部旧石器時代後半から中部旧石器時代<sup>(1)</sup>に位置づけられること、また日本にある数少ないヨーロッパのハンドアックスであり日本の旧石器研究にも

資することの大きい資料であると考えられるため今回紹介する次第である。

## 一 採集地について

今回紹介するハンドアックスはフランス西南部のシャラント (Charente) 県内のサン・メーム・レ・カリエール (St. Mème les Carrières) で採集された資料である。サン・メーム・レ・カリエールはボルドー (Bordeaux) の北方およそ一〇〇kmに位置しており、二〇km西方にはコニャック (Cognac) が位置する (第一図)。  
一九九三年当時、フランスのボルドーI大学の第四紀研究室に所属して学位論文<sup>(2)</sup>でこの地域を対象として取り上げたデベナートゥ (A. Debénath)<sup>(3)</sup>がこの地域の地形的、先史学的特徴について書いたメモをまとめると以



第1図 サン・メーム・レ・カリエールの位置

下のようになる。

シャラント河岸段丘には下部旧石器時代の遺跡をはじめとして数多くの先史時代の遺跡が残されている。特に旧石器時代のヒトによって残された行動の痕跡は河岸段丘の広範囲にわたって確認できる。シャラント河岸段丘に位置するほとんど全ての採掘できる礫層からの原石は、下部旧石器時代の遺跡から検出される石器に使われている。

第四紀更新世の環境変化にともなって、シャラント川の流れは河床を深く掘り下げると同時に、通常われわれがテラスと呼ぶ流れに沿った河岸段丘を構成している物質を堆積させる。堆積を構成する物質は砂、さまざまな大きさの砂利、時には粘土、泥土である。シャラント河岸段丘の堆積は、高、中、低の三段階に区別され、その標高はおおよそ高いところで四〇m、低い箇所で二〜五mである。ポアトーシャラント (Poitou-Charentes) 地域圏の主要な河川である、ヴィエンヌ (Vienne)、クライン (Clain)、タルドワル (Tardouze)、シャラントなどは発達したテラスを形成し、さまざまな研究の対象となってきた。先史学においては下部旧石器時代遺跡の豊富なソナム川段丘とシャラント川段丘を比較したブルーユ神

父の研究は有名である。先史時代研究当初の段階から、ヴィエンヌ川とシャラント川の段丘は研究者の関心をひきつけた。なぜなら、そこには数多くの旧石器時代の生活痕跡が残されているからであり、さらには中部旧石器時代や上部旧石器時代の初期の遺跡なども少なくないが、なかでも下部旧石器時代の遺跡が主要であるからである。

一般に河岸段丘はヒトの生活に必要な水となる水を付近で確保できるという立地上の利点だけではなく、水を飲みに来る動物の群れを狩る獵場としても当時のヒトにとって重要であったと考えられる。また同時に付近の礫層が石器製作に必要な原石となる多くの硬質のフリントを包含していることや河床での転礫採取が可能であったことも旧石器時代のヒトの占地にとって有利な条件となる。つまり、生活上必要不可欠である石器石材の獲得が容易なことである。したがって、石器製作や動物の狩獵の結果として多数の石器、特にバイフェースと動物遺存体が得られる。しかし不幸にして、多くのシャラント河岸段丘の石器資料は現代の考古学的な研究に使用することができない。なぜなら、石器や動物遺存体などの考古学的資料が発見または採集された層位や正確な地点も知られていないからである。

また慶応義塾大学民族学考古学研究室の卒業生であり、八八年から九四年にフランスのボルドー大学に留学していた奈良貴史氏からソンヌヴィユ・ボルドー (Sonneville-Bordes) から聞いた話として以下の教示を得た。一点目としては二〇世紀初頭よりシャラント河岸段丘ではすでに大量のフリントを包含することが知られており、一九九三年当時においても石器を表面採集することが可能であるという。この点は前述のデベナートウのメモの記載とも一致するところであり、この地域の旧石器時代研究における重要性はフランスの研究者間にも共有されていると言える。二点目としては、これまで本格的な発掘調査は行われたことがないということである。三点目はボルドー大学の研究室にもこの遺跡の石器資料が四ヶースほど保管されているが、全て表面採集資料であるということである。また具体的にいつ誰が採集したものであり、どれ程の量であり、石器組成の内容などといった点に關してもわからない。

以上のような情報から、今回紹介するハンドアックスが採集されたサン・メーム・レ・カリエールを含めたシャラント谷地域における先史学的研究上の重要性は研究史の初期段階から認識されていたと言える。しかし、本

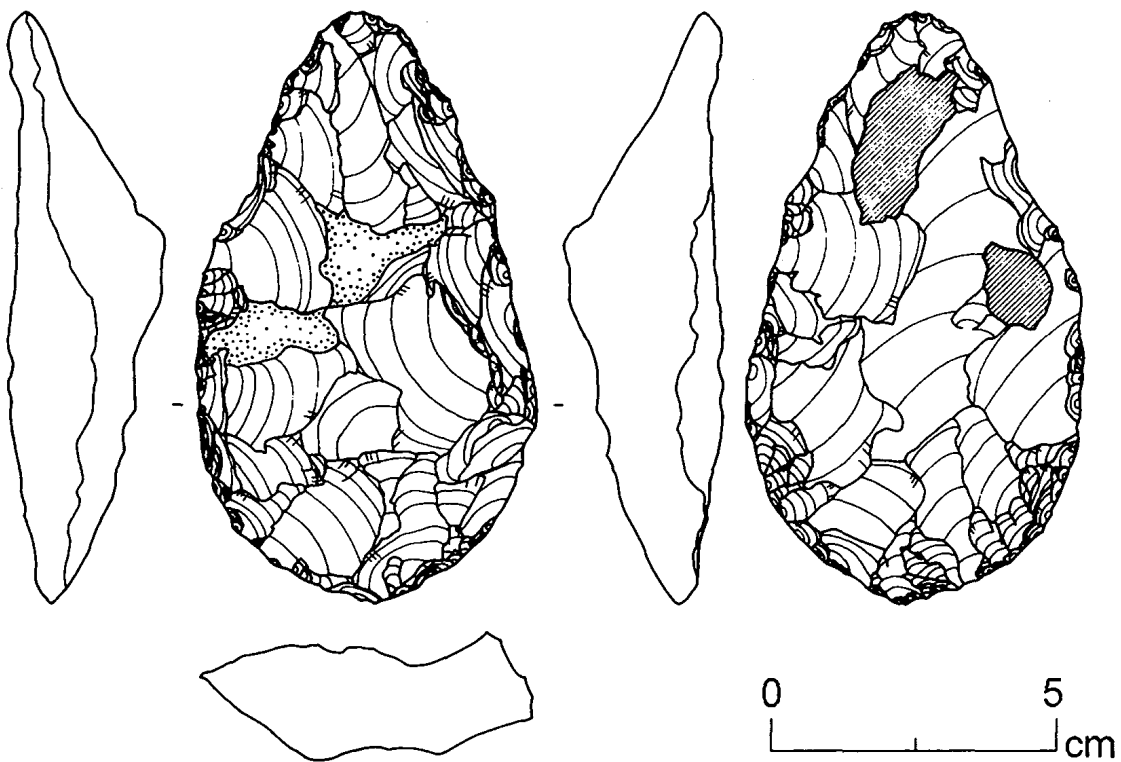
格的な発掘調査が行われたことのない地域であり表面採集による資料が主のためそれらから考古学的に質の高いデータをを得ることは困難である。よって今回は資料の形態的特徴の検討からその意義を示したい。

## 二 提示資料について

### (一) 提示資料の観察と分析

紹介するハンドアックス(第二図<sup>(6)</sup>)は最大長一〇・六cm、最大幅六・一cm、最大厚二・八cmである。石材は黄褐色を呈するフリントが使用されている。実測図正面左図に原礫面が残されている点、実測図正面右図の基部に素材剥片作出の際のバルブと思われる高まりが観察できる点から自然礫から剥離された大型の剥片を素材に用いていると考えられる。また腹面には素材剥片を剥離した際に剥落したと思われる二箇所(の夾雑物が認められる。

調整加工についてみていくと背面については全周にわたって剥離を施し、大まかな形状が整えられている。しかし背面中央部には原礫面が剥離されず残されている。その後(に)続くより細かな剥離が先端部に施されやや丸みを呈する尖形に整えられている。左右両側縁には細かい



第2図 サン・メーム・レ・カリエール採集のハンドアックス

調整剥離が部分的にしか行われず、結果として上半部の縁辺が直線状ではなく不規則な凹凸を呈している。腹面側も大まかな調整剥離が行われているが、右側縁上半部にはそれが施されず細かい調整剥離痕が若干残されているのみである。腹面基部には入念な調整加工が施され、丸みを帯びた形状に整えられている。

最終的な形態はほぼ左右対称となっているものの、両側縁は先端部から胴部中央にかけて調整加工が十分施されず直線状を呈していない。基部は円基状となっている。側面観は背面に残された原礫面をとまなう凸部が特徴的である。表裏境となる左右の縁辺は側面図の中央ではなく、左側面下半部では背面側に、右側面では全体的に腹面側に偏っている。

## (二) 提示資料の分析

ここではフランソワ・ボルド (Bordes, 1938)、『デベナートウとディブル (Debenath and Dibble, 1994)』によるハンドアックスの分類を参照して提示資料の分析を行うが、まずボルドによるハンドアックスの分類を概観しておきたい<sup>(7)</sup>。はじめにハンドアックスの計測が行われる(第三図)。さまざまな個所が計測されるのであるが、実

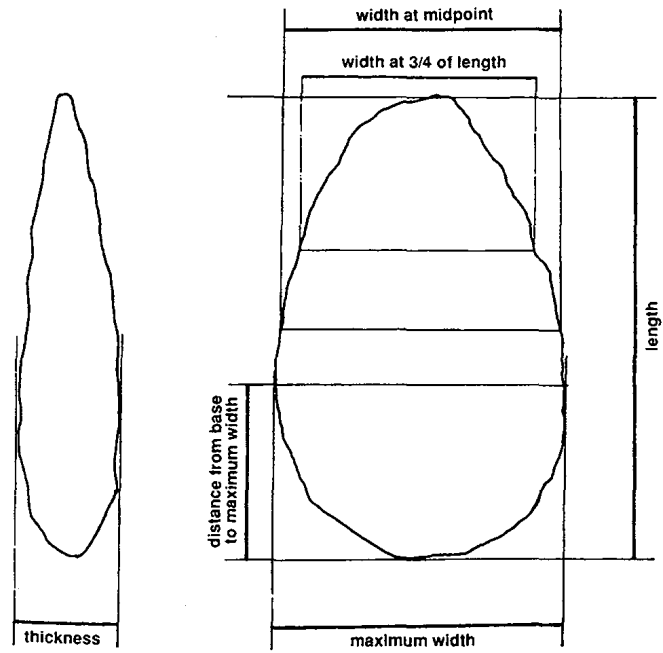
際の分類に用いられるのは以下の項目である。

- 一・ 最大長を基部から最大幅までの長さで除した値 (Location of maximum width)
- 二・ 最大長の中点での幅を最大幅で除した値 (Roundness of edges)
- 三・ 長幅比 (elongation index)
- 四・ 幅厚比 (Flatness ratio)

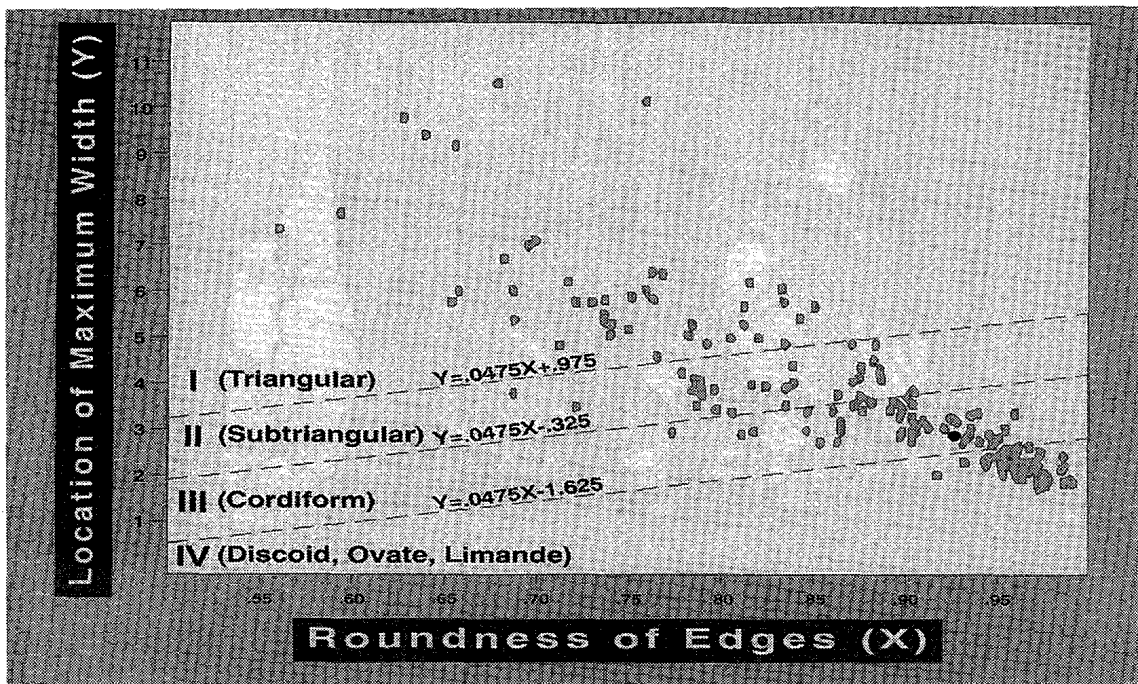
上記の項目のうち幅厚比の値によって平坦型 (Flat) と厚型 (thick) が区分される。二・三五以上は平坦型、以下は厚型となる。平坦型についてはその次に location of maximum width と roundness of edges の相関関係から細分が行われる(第四図)。第四図においてグループIVとなる円盤形 (Discoid)、『楕円形 (Ovate)』、『リマンド (Limande)』に関しては、長幅比の値が一・三以下は円盤形、一・三以上一・六以下は楕円形、一・六以上はリマンドと分けられる。

次に厚型の分類であるが、平坦型のように明確な基準が示されることはない。厚型のハンドアックスとされる杏仁形 (Amygdaloid)、『槍先形 (Lanceolate)』、『ミコキア (Micoquian)』、『フィクロン (Ficron)』のうち、杏仁形は平面形態が心臓形 (Cordiform) と同じだが幅厚比が

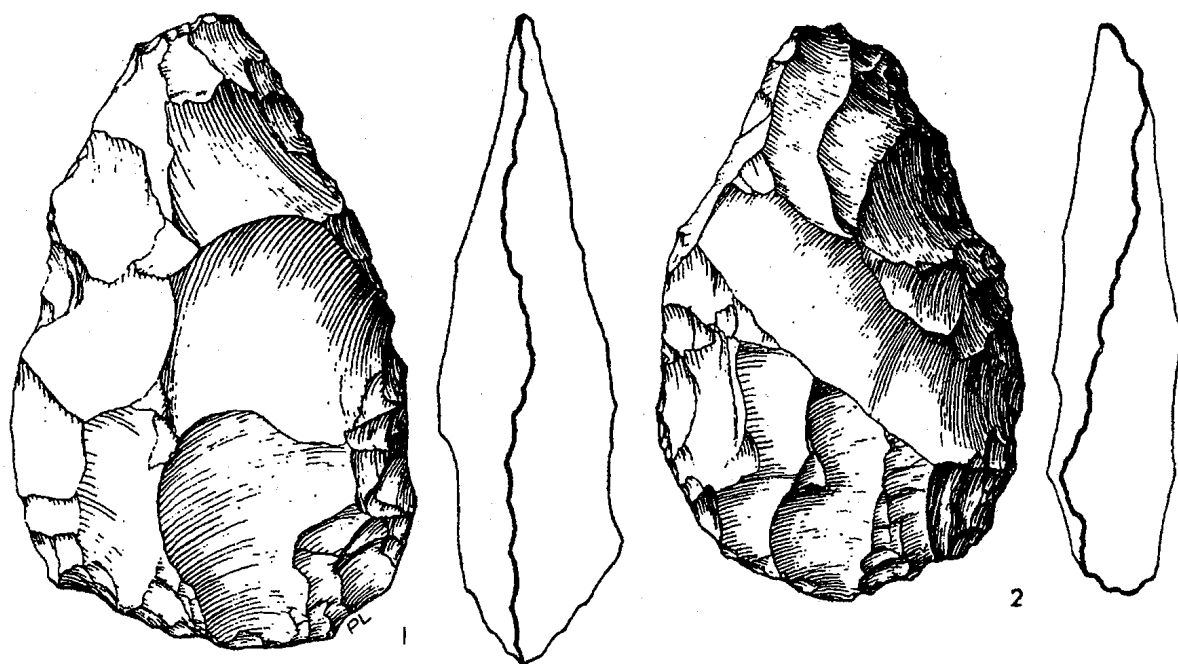
二・三五以下という点で区別される。残りの三つは側縁の形状によって分けられる。つまり槍先形は側縁が直線状もしくは軽微な凸状、ミコキアンは側縁が凹状、フィクロンは側縁が凸状、凹状を呈するが調整加工が槍先形、ミコキアン形ほどでないに施されないとされる。結果、ハンドアックスは大きく槍先形、ミコキアン、フィクロン、三角形、亜三角形 (Subtriangular)、心臓形、杏仁形、楕円形、円盤形、リマンドの十種類に分けられるこ



第3図 ハンドアックスの計測箇所  
(Debénath and Dibble 1994 Fig. 11. 2 より転載)



第4図 Location of Maximum Width と Roundness of Edges の相関関係 ●：提示資料  
(Debénath and Dibble 1994 Fig. 11. 3 に一部加筆)



第5図 杏仁形ハンドアックス (Bordes 1988 PL. 68-1. 2より転載)

とになる。

提示資料について以上の基準を当てはめて分類を行うと、幅厚比の値より厚型のハンドアックスに分類することが可能である。さらに location of the maximum width と roundness of edges の相関関係から (第四図)、杏仁形に分類される。今回の提示資料は杏仁形ハンドアックスに属することになる。

参考事例として杏仁形ハンドアックスの類例をボルド (Bordes, 1988) から示しておく (第五図)。杏仁形の形態を呈するハンドアックスについてボルドは中期アシュールリアンからアシュールリアン伝統のムステリアン石器群 (Mousterian of Acheulian Tradition) の杏仁形ハンドアックスを示している。

### 三 提示資料の帰属時期について

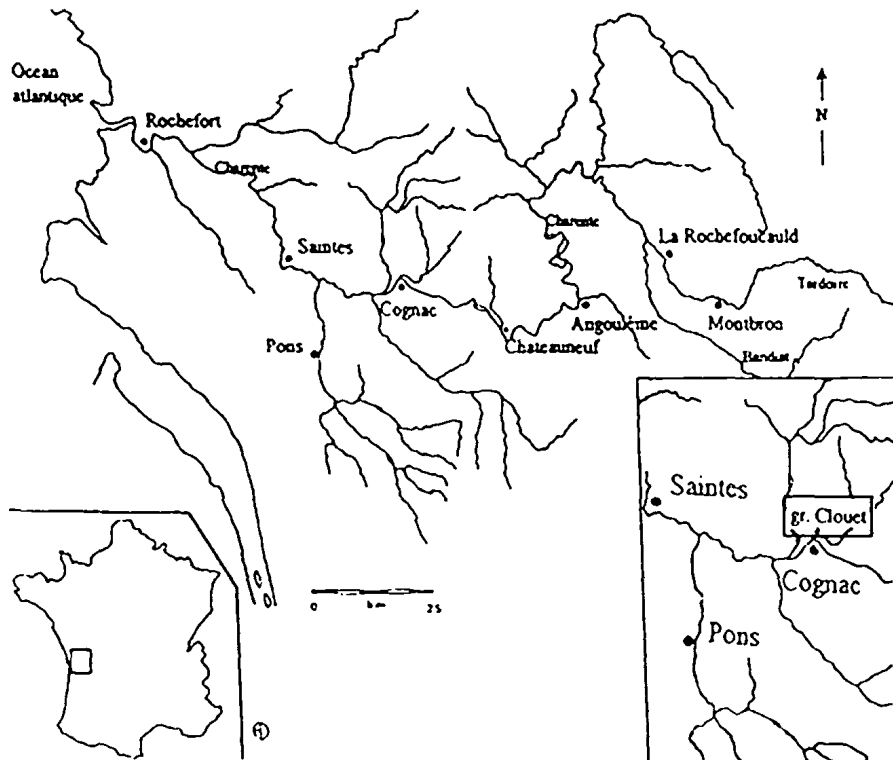
今回紹介したハンドアックスについてその帰属時期について検討してみたい。提示資料は発掘による出土遺物ではなく表採資料であるということから出土層位によってその帰属時期を推定することは不可能である。よって今回はコニャックに位置する遺跡として近年紹介されたマルセル・クルエ (Marcel Clouet) 洞穴 (Debenath 1971,



Matilla et Debénath 2003) にて類似のハンドアックスが確認できたため、それらの資料を参考事例として挙げ、提示資料のおおまかな帰属時期を推定することとする。

(一) マルセル・クルエ洞穴の概要

シャラント川の支流であるアンテーヌ (Antenne) 川周辺には十六箇所の遺跡が知られており、そのうち少なくとも四地点が旧石器時代の遺跡であり、第二地点とされているのがマルセル・クルエ洞穴 (第六図) である。一九五八、一九五九年にシャラント県の先史学者であるブルネ (C. Burnez) によって、一九六九年から一九七四年にはデベナートゥによって発掘が行われた遺跡である。しかしブルネが発掘を行ったのも以前から不法な発掘が行われており、遺物の散逸を防ぐという目的から行われたものであった。マテイラとデベナートゥ (Matilla and Debénath, 2003) によればブルネの発掘した層位は上部旧石器時代にあたり、その後のデベナートゥの発掘によってさらに下層から中部旧石器時代の文化層が確認されたと報告されている。



第6図 マルセル・クルエ洞穴の位置 (Matilla and Debénath 2003 Fig. 1 より転載)

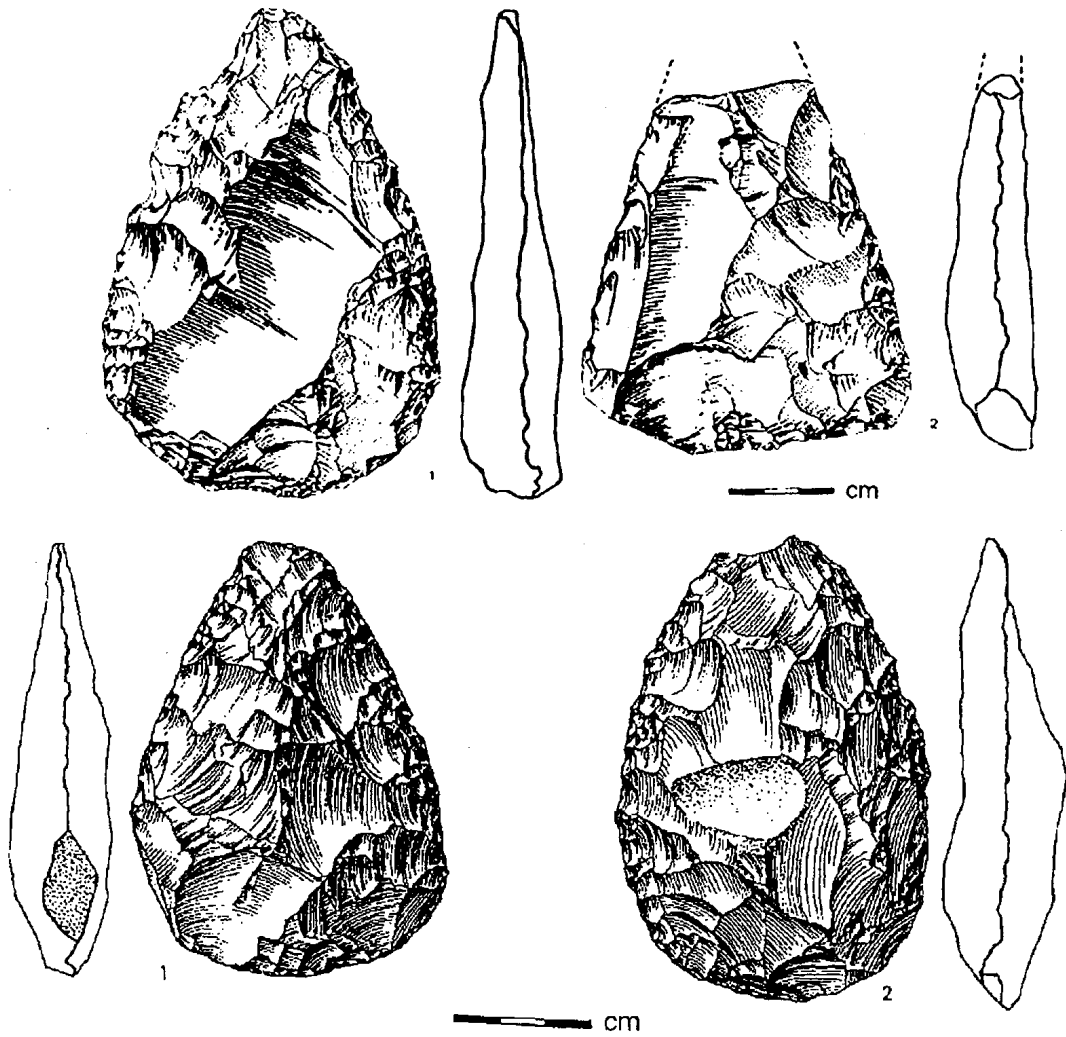
(二) マルセル・クルエ洞穴出土のハンドアックスと提示資料の帰属時期

デベナートゥは自ら発掘した部分を六つの層に分けている。ハンドアックスの出土を確認したのはそのうち第

五層と第四層の二つの層である。それぞれ三点、二点のハンドアックスが出土している。第五層から出土した三点のハンドアックスのうち、二点が心臓形、一点が楕円形に分類されている（第7図・下）。すべて剥片を素材として製作されており、打面が残されている。図を転載した心臓形のハンドアックスは礫表を打面としており、背面、腹面ともに遠端部が入念に調整されている。もう一方の楕円形のハンドアックスについては、広範な二次加工が施されており先端部から右側縁中央部、左側縁全体にさらに細かい調整剥離が施されている。腹面側は平坦加工が全面的に施され全体としての形状が整えられている。

第四層出土の二点のハンドアックスは一点が心臓形に、一点が三

西南フランス出土のハンドアックス



第7図 マルセル・クルエ洞穴出土のハンドアックス

上：第4層出土 下：第5層出土

(Matilla and Debénath 2003 Fig. 12, Fig. 8に加筆)

角形に分類されている(第7図・上)。心臓形のハンドアックスの背面は平坦な二次加工が広範に施されている。また左側縁の遠端側には二か所の鋸歯状加工が認められる。この部分は準急角度の剥離によって作出されている。基端側は急角度の剥離によってその形状が整えられている。腹面側については、二度の調整剥離によって素材剥片のバルブは取り除かれ平坦打面が残されている。三角形のハンドアックスは遠端部を欠損している。背面は比較的大きな剥離面が残され、基端部により細かい剥離面が残されている。腹面は平坦加工によって素材剥片のバルブの高まりが除かれている。

マルセル・クルエ洞穴で確認した中部旧石器時代の石器群について、Matilla and Debenath (2003) では次のように述べられている。アシュリアン伝統のムステリアン石器群は以前行われていたように中部旧石器時代の古い段階であると評価することはできない。なぜならばハンドアックスの存在が必ずしも古い段階を示すことにはならないということが認められているからである。マルセル・クルエ洞穴の石器群はむしろ中部旧石器時代の新しい段階に位置づけられそうである。しかし大きな問題としてシャラント県において良好な堆積を確認できる

洞穴遺跡の少なさや、既存の資料についても古い時代の発掘調査で得られたものが多いため比較検討を行うことは困難である。

しかしあえて今回の提示資料の帰属時期を推定すると、下部旧石器時代の後半から中部旧石器時代の資料であるという結論になる。マルセル・クルエ洞穴出土のハンドアックスとの形態的類似から提示資料については中部旧石器時代の所産と考えることはできる。また前述のデベナートウのメモの中にはシャラント県における下部旧石器時代のハンドアックスの特徴が認められるという指摘もあるが、現段階ではこれ以上の時期の特定は困難であると言わざるを得ない。

#### おわりに

以上西南フランスのサン・メーム・レ・カリエール採集のハンドアックスについてその形態的特徴を分析し、帰属時期について推定を試みた。結果として帰属時期については下部旧石器時代後半から中部旧石器時代という推定に終わった。帰属時期をしぼりきれない背景には今回の提示資料が採集資料であるという点だけではなく、当地における既発掘資料の未整理や未報告が少なからず

あるという点も指摘できる。シャラント県地域には下部旧石器時代から上部旧石器時代の累積された多くの遺跡が残されていることは重要な点であり、今回紹介した資料は、シャラント県地域が旧石器時代の通時的な石器群の変遷を辿ることができる稀有な地域であることを示す資料の一部と捉えられる。このような旧石器時代研究上の重要な地域であると考えられるため本格的な発掘調査の行われることを期待しつつ、本資料を紹介した次第である。

#### 謝辞

慶応義塾大学文学部の阿部祥人先生には本稿執筆の機会と作成上の御助言をいただいた。国際医療福祉大学リハビリテーション学部の奈良貴史先生にはフランスのシヤラント県における旧石器時代の研究状況について御教示をいただいた。また本稿執筆にあたり佐藤孝雄先生（慶応義塾大学文学部）、石神裕之先生（慶応義塾大学文学部）、工藤敏久氏にもお世話になりました。末筆ながら記して感謝申し上げます。

#### 註

- (1) 日本では旧石器時代の細分時期について前期、中期、後期という呼び名が一般的であるが、今回紹介する資料はフランスのものであるため、inferieur, moyen, supérieurにそれぞれ対応した下部、中部、上部という用語を用いる。
- (2) Debénath, A. 1974. Recherches sur les terrains quaternaires charentais et les industries qui leur sont associées. Thèse de Doctorat d'état es Sciences naturelles, Université de Bordeaux-I (筆者未読)
- (3) A. Debénath から奈良貴史氏にあつた私信であるが、奈良氏の許可を得て筆者がまとめたものである。
- (4) フランスの行政区画の一つであり、シャラント県はこの地域圏に含まれる。
- (5) Breuil, H. 1937. Somme et Charente. Comparaison de leurs dépôts quaternaires et de leurs industries paléolithiques anciennes, Bulletin et Mémoires de la Société archéologique et historique de la Charente. 83-92 (筆者未読)
- (6) 九六年慶応義塾大学民族学考古学専攻卒業の片岡泰樹氏の原図に筆者が加筆・修正を加え、トレースを行った。
- (7) 分類項目については Debénath, and Dibble. (1994) で用いられている英語表記を用いる。

#### 参考文献

Bordes, F. 1988. *Typologie du Paléolithique Ancien et Moyen.*

CNRS

- Debénath, A. 1971. Note Préliminaire sur la Stratigraphie de la Marcel Clouet à Cognac (Charente), Bulletin de la Société Préhistorique Française. Vol. 68. 133-135
- Debénath, A. 1992. The Place of the Mousterian of the Charente in the Middle Paleolithic of Southwest France. in *The Middle Paleolithic: Adaptation, Behavior, and Variability*, eds. H. L. Dibble and A. Debénath. Philadelphia: The University Museum, University of Pennsylvania. 53-57
- Debénath, A and H. L. Dibble. 1994. Chapter 11. Bifaces and Cleavers, In *Handbook of Paleolithic Typology Volume One Lower and Middle Paleolithic of Europe*. Philadelphia: University Museum, University of Pennsylvania. 129-171
- Matilla, K. and Debénath, A. 2003. La Grotte Marcel Clouet à Cognac (Charente), Bulletin de la Société Préhistorique Française. 107 (1) 49-115